

令和 7 年 度

社会人入学試験

国語総合

広島県立三次看護専門学校

第一看護学科

受験番号() 氏名()

- ## 答案作成上の注意

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小説家で自作解説をする人がたまにいる。ぼくは「ちよつとな…」と思う。なぜそんなふうにするのかと言うと、一つは「ぼくの自由に読ませてよ」と言いたいからだ。もう一つは、自作解説ができるほど言いたいことがはつきりしているなら、なにも小説などという回りくどい表現形式をとる必要はなかったのではないかと思うからだ。①は②はじめから評論を書けばよかったのだ。

小説は言葉を使ってこの世界に似せたイメージを作る表現形式である。世界はそれ自身では主張を持たないから、ぼくたちは小説を「自由」に解釈できる。それが、小説を読む楽しみだ。ところが、評論はそうではない。古典的名著ともなれば評論でもさまざまな解釈がギン^aわれることがあるが、ふつうは評論の主張ははつきりしている。「自由」に解釈すれば「誤読」となることが多い。

A、ぼくたちはなぜ評論を読むのかと言えば、それは自分の知らないことやわからないことを、知りたいしわかりたいからだ。それが知的な虚栄^{きやうえい}心^{しん}というもので、これがなくなったら精神的な「老人」である。精神的な「若者」は、友人が本を読んだと聞けば、たとえ自分が読んでない本であっても「読んだよ」と答えるものだ。そして、あわてふために本屋さんか図書館に行つて、わかつてわからなくても一バン^bでそれを読んで、翌日には涼しい^{すず}顔をして「そう言えば、あれはたいした本じゃないね」なんて言ってみるものだ。そんなふうにして、ぼくたちは教養を身につける。②

ぼくは「教養」という言葉を二つの意味でとらえている。一つは知識の量で、これは多ければ多いほどいい。しかし、これは少し古風な教養のとらえ方である。現代ではあまりに多くの情報があふれているからとても追いつけない。その上に過去のことまで知っていなければならぬとしたら大変だ。もちろんそのための努力は大切だが、限りがある。そこで二つめの教養の意味が必要だと考えている。それは、物事を考えるためのサヒョウ^cジク^cをできるだけたくさん持つことだ。「たくさん」とは言っても、ぼくたちの思考方法にはその時代ごとに流行があるから、これは無限というわけではない。ぼくは、その時代に必要な思考方法を身につけることを第二の教養、そして現代の教養と呼んでおきたい。この現代の教養を身につけるために評論を読むのである。

ふつう「評論は、筆者の言いたいことを読解すればいい」と考えている人が多いと思うが、実は評論を読むにもコツがある。ただし、これは「評論早わかり」という類^{たぐい}のものではない。具体的には、評論にも「内包された読者」の位置が用意されているということなのである。ごく簡単に身^Aも蓋^{ふた}もない言いか方をすれば、「ふつうはこう思っているだろうが、ぼくはこう思う」と書くのが評論である。実際、たっぴいま書いたぼくの文章がそうになっているではないか。

この「ふつう」の位置が「内包された読者」の位置だ。そう、ちよつと「おばかさん」を演じるのが、評論を読むコツなのである。③そうすると、「へえ、そうだったのか!」という具合に評論が面白く読める(こともある)。具体例を見ておこう。

じぶんの身体からだというものは、だれもがじぶんのもつとも近くにあるものだとおもっている。(中略)ぼくとはほかならぬこのぼくの身体のことだと言
いうほどに、ぼくはまちがいはなくぼくの身体に密着している。ところが、よく考えてみると、ぼくがじぶんの身体についてもっている情報は、ふつ
う想像しているよりもはるかに貧弱なものだ。身体の全表面のうちでじぶんで見える部分というのは、ごく限られている。だれもじぶんの身体の内部
はもちろん、背中や後頭部でさえじかに見たことがない。それどころか、ましてや自分の顔は、^dシユウセイシュウセイ見ることができない。ところがその顔に、
じぶんではコントロール不可能なじぶんの感情の揺れが露出してしまふ。なんとも無防備なのだ。

わしだきよかず
(鷺田清一「ちぐはぐな身体」、傍線部はママ)

いま傍線^eをホドコしたところに、「ふつう」の読者の位置が、すなわち「内包された読者」の位置が明確に示されている。たぶん、鷺田清一は「ふつう」
の人は①「自分の身体のことなら自分が一番よくわかっていると思ひ込んでいる」と考えている。それを前提として②「いや、実は自分の身体ほどわかり
にくいものはないのだ」と説いているのである。そこで読者が「なるほど」^④と思えば、鷺田清一の勝ちである。この文章は、「二項対立」が利いている。(既
知の身体／未知の身体」という図式である。「ふつう」の読者は①〈既知の身体〉の側にいて、鷺田清一は②〈未知の身体〉の側にいることになる。

人は①はいわば常識と言える部分で、②はそれに対する批判的検討(批評)だと言える。評論はこの二つの要素がうまく組み合わせられてはじめて成功す
るのである。つまり、二項対立をうまく使うことが評論を読んだり書いたりするコツなのだ。一番みじめなのは①の常識の^fハイクハイクが間違ってしまった場合
で、これがズレていると、何に対してイギ^g申し立て(批評)を行っているのかサツパリわからないようなピンぼけの文章になってしまう。次にみじめなの
は、②の批判的検討(批評)が実は常識そのものでしかなかった場合で、^hボソボソボソボソな評論になってしまう。たとえば、「ふつうは自分の身体のこととはよ
くわからないと思っているだろうが、実は自分の身体のこととは自分が一番よく知っている」という構成になっていたら、前半は「なにわけのわからないこ
と云っているの?」となって、後半は「当たり前じゃん」ということになってしまうだろう。

この点に関して、フリーライターの永江朗が面白いことを言っている。新聞の読者ⁱトウコウ欄トウコウ欄によくある「ゴミを捨てるのはよくない」とか「電車では
老人には席を譲ろう」といった文章は、わが新聞は「こういうつまらないふつうの人々が読んでいるんですよ。みなさん、ご安心下さい」というメッセー
ジであって、お金をもらうための文章ならば「ゴミを捨てれば、ゴミを拾う人の仕事が増えるのだからゴミをどんどん捨てよう」とか「老人をギタ^jえるた
めに、席を譲るのはやめよう」ぐらいのことは書かないとダメだと言うのだ。

まったくその通りだ。もともと新聞は「ふつう」の人に向けて作られているのだから当然と言えば当然で、「ふつう」でいいのだが、評論でプロになるた

めには「ふつう」ではダメなのである。それでいて「ふつう」がよくわかっていなければならない。B^⑤、評論とは「ふつう」がよくわかっている人が「ふつう」でないことを書いた文章なのだ。その意味で、鷲田清一の文章はみごとに評論になっている。そして、「ふつう」の読者の振りをしたぼくたちも、みごとに成功したわけだ。

⑥問題は、この「ふつう」が時代とともに変わってくるところにある。昔の「ふつう」はいまの「ふつう」ではないということがよく起きる。「昔の常識はいまの非常識」というわけだ。だから、小説よりも評論の方が早く古くなる。あるいは、古さが目立ってしまうと言わなければならないか。

（石原千秋『未来形の読書術』による。出題の都合上、一部改変した。）

注 鷲田清一：哲学者。

二項対立：二つの概念が互いに矛盾したり、対立したりする状態。

問一 傍線部 a i のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部①「はじめから評論を書けばよかったのだ」とあるが、筆者が「自作解説をする人」をそのように批判するのは「小説」と「評論」とで何が違うと考えているからか。七十字程度で答えなさい。

問三 空欄 A ・ B に当てはまる語を、次の①～⑤の中から選び、番号で答えなさい。

- ① つまり ② けれども ③ ただし ④ では ⑤ たとえば

問四 傍線部②「ぼくたちは教養を身につける」とあるが、「教養を身につける」のは「ぼくたち」に何が備わっているからか。それを示した言葉が本文中から抜き出して答えなさい。

問五 傍線部 A 「身も蓋もない」の意味を、端的に説明しなさい。

問六 傍線部③「「おばかさん」を演じるのが、評論を読むコツなのである」とあるが、「評論を読むコツ」について、別の言葉で明確に言い表した十二字の言葉を、本文中から抜き出して答えなさい。

問七 傍線部④「驚田清一の勝ちである」とあるが、「勝ち」だと言えるのはなぜか。九十字程度で説明しなさい（句読点なども一字と数える）。

問八 傍線部⑤「そして、「ふつう」の読者の振りをしたぼくたちも、みごとに成功したわけだ」とは、どういうことに「成功した」というのか。五十字程度で説明しなさい。

問九 傍線部⑥「問題は、この「ふつう」が時代とともに変わってくるところにある」とあるが、「「ふつう」が時代とともに変わってくる」という問題について、看護の現場において、どのような意味を持つてくると考えるか。あなた自身の看護や介助、介護、入院等の経験や知識に基づいた具体例を示しながら、二百字程度であなたの考えを述べなさい（句読点なども一字と数える）。